

『人々はイエスに言った。「ヨハネの弟子たちは度々断食し、祈りをし、ファリサイ派の弟子たちも同じようにしています。しかし、あなたの弟子たちは飲んだり食べたりしています。」34 そこで、イエスは言われた。「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客に断食させることがあなたがたにできようか。35 しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その時には、彼らは断食することになる。」36 そして、イエスはたとえを話された。「だれも、新しい服から布切れを破り取って、古い服に継ぎを当てたりはしない。そんなことをすれば、新しい服も破れるし、新しい服から取った継ぎ切れも古いものには合わないだろう。37 また、だれも、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりはしない。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は革袋を破って流れ出し、革袋もだめになる。38 新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れねばならない。39 また、古いぶどう酒を飲めば、だれも新しいものを欲しがらない。『古いものの方がよい』と言うのである。』

【説教】

本日の聖書の言葉は、信仰のあり方や方向性といったことについて考えさせられるところだと思われまふ。ここでは他の人の弟子たちが断食をしているのに、イエスさまの弟子たちは断食をしていませんでした。断食をする代わりに、飲んだり食べたりしていたのがイエスさまの弟子たちです。その食事の様子を、イエスさまは結婚式の披露宴に譬えられました。他にもイエスさまはよく宴会の譬えをなされています。言ってみれば、イエスさまの弟子たちの信仰と言うのは、「宴会型」だと言えるかもしれません。一方で、それまでの古い信仰のあり方というのは、「断食型」となるわけだ。この信仰の型の違いに、他と比べてのイエスさまの新しさがあるわけだ。

その古いほうの断食型ですが、これは悔い改めていることをアピールするものでありまふ。他の人を傷つけてしまったりとか、神さまに対して罪を犯したことを私は反省していますよと、表現するものです。「もう決して同じ罪を犯しませんから、どうぞ罰しないでください」と、赦しをこうのが断食だったのです。このことは腰が低く、とても良い姿勢にも思ひまふ。やはり何か悪いことをしてしまった時は、ちゃんと反省するということは大切だと思ひまふ。しかしイエスさまがもたらした信仰の新しさは、この断食をいたしませんでした。どうでしょうか。反省したり悔い改めるという事は必要ないのでしょうか。それともイエスさまの弟子というのは、イエスさまに従うようになってからは、全く罪を犯さなくなったのでしょうか。そんなことはないですね。イエスさまの弟子たちだけが、立派な人間ばかりだということはないでしょう。他の人の弟子たちと同じように、やはりイエスさまの弟子も、ときには間違いを犯してしまひまふ。人間というのは大きなところから見てみますと、誰もにたりよったりで完璧な人というはいないと思ひまふ。それではどうしてイエスさまの弟子たちだけが、この心からの反省を示す断食をしなかつたのでしょうか。

これは以前ここで説教の中で言わしてもらったことですが、イエスさまのもたらした新しさに関係することだ。それまでは、神さまの罪に対する裁きというのは、未来において天の国で受けるのだと考えられていまふ。聖書の言葉では、「最後の審判」と言ひまふ。その未来の裁きを、今この時に、イエスさまが共にいらっしやる間に、受けてしまうというのがその新しさだ。少し前の聖書箇所 5 章 20 節見て欲しいと思ひまふ。そこには、「人よ、あなたの罪は赦された」とありまふ。この時勢は、現在完了形だ。それは、赦されてしまふて、それが今もずっと、これからも続いているというものです。特にこのことが顕著に表れるのが、「洗礼」だ。それは、水に浸って一度死ぬということだ。イエス・キリストの執り成しの中で、その守りの中で、今ここで古い自分のあり方を死んでしまうというものです。そして、神の裁きはもうそこで済みまふしたので、これからは赦された者として、新しく生まれ変わったということを表すものでありまふ。ですから、これから先の未来の神さまのお怒りや裁きを、もう待つ必要はなくなつたのですね。

このことは、イエスさまの弟子たちが、何か過ちを犯してしまふたときに反省しなかつたのということではありません。反省したり悔い改めたりしまふますが、それが今、一瞬のうちに、イエス・キリストのその臨在のもとで、すぐに答えが返ってくるのです。神さまの愛が、たちまち信じる者たちの汚れを、燃やし尽くしてしまうのですね。つまり弟子たちの悔い改めの思ひと神さまによるお赦しが、ぴったりと重なるというのがイエスさまの新しさだということだ。

ここでは花婿としてのイエスさまが取り去られたとき、イエスさまの弟子たちが断食するのだとあります(35 節)。これは、イエスさまが共にいて下さらないと、たちまち古い教えに戻ってしまい、また未来の神の裁きを恐れなくてはならないことを表しているのだと思います。しかしですね、その花婿が取り除かれたのは、どれぐらいかといいますと 3 日でありましたね。たった 3 日の間しか断食する必要はありませんでした。イエスさまはその死後、3 日目に復活し、また弟子たちの前に現れました(24 章 7 節参照)。そこでまた以前と変わらない食事、宴会を弟子たちと共に開かれたのです(24 章 43 節参照)。神の子イエス・キリストを否んで、拒絶してしまったといった、そのような弟子たちのとっても大きな罪さえも、一瞬のうちに赦され、また元の同じ関係に回復されました。このことがいかにキリストが共におられるということが、最後の審判という最も強力な神の裁きに対して有効であるのかがよくわかることだと思います。

そしてこのことは洗礼だけではなく、主の晩餐、聖餐式にもよく表れています。ここでの聖書箇所では、ぶどう酒の譬えが用いられています(38 節)。ぶどう酒と言えば、やはり聖餐式に配られる杯のぶどう液を思い浮かべると思います。主の晩餐のぶどうの杯は、イエスさまの流された血を表しています。私たちが含めた人間の罪深いあり方が、神さまを拒絶したことで流された血であります。ですから当然この杯を飲むときには心の痛む瞬間が、どうしても伴います。「ふさわしくないままで、主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります」(I コリント 11 章 27 節)と言われると、心にズキッと痛みが走ると思います。イエスさまだけではなくて、私たちは何かを犠牲にしてしまったり、誰かを差し置いてでも生きざるをえない存在だと思えます。そういった意味でこのぶどうの杯は、神さまの裁きを受ける瞬間であるとも言えると思います。しかし、どうでしょうか。聖餐式というのは断食のような悲壮感漂う悲しみの時ではないと思います。むしろ披露宴や宴会で振る舞われる、おいしいぶどう酒をいただいた時のような、喜びの祝福の時であります(ヨハネ 2 章 10 節参照)。すなわち神様のおしかりは、たちまち赦された、喜びの杯に変化するのです。この新しいイエスさまの宴会型の信仰の姿というのは、神の赦しをまず先に受けて、今この神さまのお赦しの中で、その恵みにどう応えるのかという流れに進んで行きます。宴会でたくさんご馳走してもらって、その恵みに何かこちらからも応えたいと思うと思います。宴会の主催者に喜んでもらいたい、主催者である神さまの喜ばれることをして応えようと、まあこうなるわけですね。未来の裁きをもうすでに免除してもらっているんですから、後は安心してですね、断食なんてする暇があったら、もっと神さまがお喜びになることに精を出せば良いのだとなるわけです。

ここで新しいぶどう酒を、古い革袋に入れてしまうと破れてしまうとあります(37 節)。それは古い革袋だと、その中で新しいぶどう酒は発酵してしまい泡だらけになって膨らんでしまい、やぶけてしまうという事だそうです。これは、イエスさまのもたらしたこの新しい信仰の形というのは、それを受け取る側も新しくなることが大切だということですね。他の人の弟子たちは、この新しさについて行けず、依然として未来に受けるかもしれない神さまの裁きを恐れるあり方から変わることができませんでした。そのような状態では、いくら新しいぶどう酒を注がれても、かえってどちらもだめにしてしまうのだと言いたいわけですね。特にここではヨハネの弟子たちが、イエスさまの弟子たちと比べられています(33 節)。ヨハネというのはイエスさまに洗礼を授けた人で、イエスさまと非常に近い考え方もしていた人物です(3 章 I - 22 節参照)。しかしヨハネの授けていた洗礼というのは、どうもたった一回だけの悔い改めだけが赦されるというものだったようです。つまり一度洗礼を受けたからには、その後再び罪を犯したり過ちを犯したら、もう神さまに赦されるチャンスはないという考えだったようです。それに対して、イエスさまの新しさは何度でも、何度失敗したとしても、それらは一瞬にして神の赦しを受け取るという信仰の形でありました。何度うまくいかなかったとしても、再び神さまの赦しの中で立ち上がり、もう一度歩み出すというのがイエスさまの弟子の姿です。神の裁きを恐れるという古い革袋では、この新しいぶどう酒を生かすことは出来ません。新しいぶどう酒が注がれるときは、新しい皮袋が必要なのですね。

イエス・キリストの弟子の信仰は、断食型ではなく宴会型です。たとえ大きな過ちを犯してしまった時でさえも、神さまのお赦しと熱い愛の中で、また回復させてくださいます。いずれ天のみ国においてイエスさまと交わすぶどう酒の祝杯を、今ここで先取りして受けることが出来るのです。この恵みの杯を、心より味わい喜びたいと願います。このことを可能にしてくださったお恵みを、神さまに感謝いたしましょう。